

インターネットを活用した日本語学習 — 日本語教育におけるアクティブ・ラーニングの試み —*

錢 坪 玲 子**

Japanese Learning with the Internet : From the Viewpoint of Active Learning

Sachiko ZENITSUBO**

キーワード：

主体的学習、能動的学習、社会的構成主義、社会文化的アプローチ、アクティブ・ラーニング

1. はじめに

近年、大学教育の質的転換の必要性が叫ばれ、アクティブ・ラーニング等、効果的な学習法の適切な導入が高等教育における課題の一つとなっている。文部科学省の中央教育審議会による2012年の答申「新たな大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」においても、従来の講義形式にみられるような、教員からの一方向的な知識の教授ではなく、双方向的な学習、学習者による能動的な学習へと教育方法を改善するよう提言がなされている。「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材」を育てるために、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)」へと、大学教育は転換することが求められているのである。

一方、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」^[1]は、「基礎学力」、「専門知識」と並び、「人間性、基本的な生活習慣」に支えられる能力の全体像を構成する重要な要素として捉えられているが、「社会人基礎力」の育成もまた、今日の大学教育に対して求められている課題の一つである。

松下(2010)は、「コンピテンシー」「学士力」「汎用的技能(generic skill)」「就業能力(employability)」「社会人基礎力」等、近年、高等教育・職業教育において用いられるようになった、このような言葉によって表される概念を「新しい能力」と総称している。「新しい能力」が氾濫する現象は、日本のみならず、先進諸国に共通してみられる傾向だという。また、これらの概念は多様な概念を含むものであり、経済界や諸政策とも密接な関係が

ある。もちろん、上述したような、学習者の主体的、能動的学習を求める動きは、教育現場からの声にも押されて、学習観のパラダイム転換を成し遂げようとしつつある。外国語教育においても、課題遂行能力を重視する学習や評価が台頭し、学習者の主体的学びを促進しようとする傾向がみられる。「新しい能力」を求める現象は、近代的価値からの脱却を試みようとする、現代社会に広く見られる現象だといえるだろう。

本研究は、このような「新しい能力」概念について批判的考察を加えることは今後の課題としていったん保留し、その枠組みの中で、実際に、学習者の主体的学びや新しい学習方法の導入を促すような試みについて考えてみたい。具体的に言えば、現代社会では既に広く普及したインターネットを効果的に利用した日本語学習について、先行研究の紹介及び一つの実践報告を試みるものである。近年、各種メディアの発達著しく、それらを適切かつ効果的に語学学習に導入していくことが求められているが、ここでは、「ウェブクエスト(WebQuest)」という自律学習向け教材の方法を参考としてデザインした、留学生対象の日本語授業の取り組みを紹介する。語彙や文法等の既習項目の知識に加え、教員が事前に準備した利用可能なインターネット上の情報(資源)を提供することによって、学習者自身が問題解決のプロセスを経て新たな知識を作り出すという、社会的過程としての学習の実現化を目指したものである。

2. ウェブクエスト(WebQuest)の概要

島田・ハリソン(2001)は、「学習者が教師によって厳選された情報資源を活用しながら、さまざまな活動を通して問題解決型学習(タスク)を行うための教材」として、バーニー・ドッジ(Bernie Dodge、カリフォルニア州立大学サンディエゴ校)が開発した「ウェブクエスト

* Received January 29, 2014

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

(WebQuest)」を紹介している。これは、インターネットを利用した自律学習向けの教材であり、元来、小中学生（小中学校レベルの学習者）向けの学習教材として開発されたものであったが、島田・ハリソン（2001）では成人学習者対象の日本語教材として導入を試み、実践をおこなっている^{〔2〕}。

ウェブクエスト（WebQuest）とは、課題（タスク）、情報資源、学習プロセス等が書かれたインターネットのホームページである。教員は事前にホームページを作成し、学習者はそれらを参考に、課題達成を目標として主体的に取り組む。ウェブクエスト（WebQuest）は、学習者と教師、双方にとって「利用価値が高い」スキャフォールディング（scaffolding：足場をつくる）のためのツールとして位置付けられている。

ウェブクエスト（WebQuest）の定義について、開発者は次のように言っている。

Definitions

A WebQuest is an inquiry-oriented activity in which some or all of the information that learners interact with comes from resources on the internet, optionally supplemented with videoconferencing. There are at least two levels of WebQuests that should be distinguished from one another^{〔3〕}.

定義：

「使用される情報の一部またはすべてをインターネット上にある資源から取り出して学習する、探究志向の活動」 島田・ハリソン（2001）

ウェブクエスト（WebQuest）が開発された背景には、構成主義（Constructivism/Constructionism）に基づいた教育理論が存在する。構成主義とは、ピアジェ、ブルーナー、ヴィゴツキーらの思想を源流とするものであり、「学習は知識や経験や体験によって個人の内部に構成されていくものである」と考える。『「学び」の認知科学事典』によると、構成主義（constructivism）とは、「学習者の周りの事象と学習者がすでに有している知識との間のインタラクションを通じて、学習者の知識が再構成されることが学びであるという考え方」、社会的構成主義（social constructivism）とは、「学びの構成主義において、他者との相互交渉がその中心的な構成要素として加味された考

え方を指す。構成主義の考え方にに基づき、さらにその過程で用いられるさまざまな道具やかかわり合う他者とのやり取りを重要視した考え方」という。すなわち、知識のみならず、経験や体験を重視する学習観でもある。

島田・ハリソン（2001）によれば、構成主義は、ピアジェに代表される認知的構成主義とヴィゴツキーに代表される社会的構成主義に分けられるというが、以下のような共通点がある。

1、Active Learning（能動的学習）

学習者が能動的に学習すると、新しい知識が定着しやすく、学習目的を一層明確にしやすい。

2、Authenticity（真正性、本物らしさ）

学習は学習者にとって意味のある目的で、自分と関連性のある文脈で行われなければならない。学習者にとって、目的が明確であり意味のあるものでなければ、能動的な学習は行われず、効果的な学習は望めない。

3、Instrumental Learning

学習はいろいろな道具を使って行われるものである。インターネットをはじめとするテクノロジーは、学習者に知識を提供する道具として位置付けられている。

4、Product-oriented Learning

学習者自身が成果物を作りあげて、発表することも目的である。成果物とは、レポート、プレゼンテーションなど、第三者に見せうるものである。

5、Social construction of Knowledge

学習は一人で行うことも可能であるが、あくまでも社会的行動であり、他の人々とのインタラクションを通じて行うべきである。

6、Facilitating

教師や専門家は知識を一方的に学習者に与えるのではなく学習者の学習を支援する役割を担う。

ウェブクエスト（WebQuest）はこれらの要素を支援するために、インターネットを利用した学習として開発されたものである。島田・ハリソン（2001）では、実際にウェブクエスト（WebQuest）を用いた研修について分析しているが、分析の結果、学習者の能動的学習を促すスキャフォールディングツールとして有効である、ということがわかったと結論づけられている。

3. 実践報告

3-1. 概要

ウエブクエスト (WebQuest) の方法論を活用し、若干の修正を行いながら、筆者は留学生対象の日本語クラス (大学学部授業) を実施した。クラスは、2010年後期開講 (2年次開講選択科目) の日本語初級終了程度の留学生約20名 (国籍: 中国・ベトナム) を対象としたものである。週1回、全15回の授業で、インターネット利用や日本語入力の経験はほぼ皆無といった学生から、頻繁に使用しているという学生まで、学生のコンピュータ・リテラシーは多様であった。教室は、大学内の語学情報センター (コンピュータ室) である。ここには教員用パソコンとそれ以外の学生用パソコンがあり、教員用のパソコン上の教材ファイルは、学生用パソコンにも同内容で保存される。ただし、教材フォルダの編集権は教員用パソコンのみに与えられている。大学のGmailやチャット等のインターネット・ツールを用い、社会構成主義的学習環境を整えた。

「ウエブクエスト (WebQuest)」ではホームページとして提供される教材を、ここではWORDファイルで作成し、提供した。既に述べたように、教室の教卓コンピュータ画面の教材フォルダと学生用コンピュータ画面の教材フォルダは連動しており、ここに保存することによって、学生全員に閲覧可能なファイルを提供可能になるためである。学生には、毎回、課題と共に情報資源 (Webのアドレス等) や学習プロセス (作業手順) を与える。そうすることによって、学生は、各自、情報資源への適切なアクセスによって、手順に従い課題を段階的にクリアしていくことが可能となる。課題作成 (解答の探究) や課題提出、質問・助言のやり取り等、教員と学生の交流も含めて、ほとんどのコミュニケーションは基本的にインターネット (学内メールやチャット) を媒介としておこなった。教員1人対学生20名という状況においても、メールやチャットを利用することによって、1対1のコミュニケーションを同時に20近く実現することが容易になった。

課題の内容は、大学生活や地域生活に密着したものなど、学習者にとって身近で現実的なものに限定した。例えば、大学祭の詳細や学期スケジュール、学内施設・器具使用や就職・進学相談の際に必要な諸手続きについて、など大学生活に関係するテーマを積極的に選んだ。このような課題の場合、情報資源としては大学HPを指定し、

WORDファイルに課題と共に記載した。

また、インターネットを利用した探索活動にとどまらず、実際の社会的行動と結びつける課題もあわせて提出した。例えば、課題を①②と2つ設定し、大学HP上の大学図書館蔵書検索で読みたい本を検索する、という課題①をクリアした後は、課題②の「図書館で本を借りる」に取り組み、実際に図書館まで行って、検索した書籍を借りて来て、教員に見せる、という設定にした。

課題は、ほとんどの場合、段階的に設定されているため、学習者は一つの課題を終了した後、すぐに教員にメール送信し、教員はその場で受信、チェックし、学生にフィードバックする。教員のチェックを経て、合格した学生のみ、次の課題に進むことができるというシステムにした。学習プロセスの途中で、何か問題が起こったり、教員の助言を求めたりしたいときは、学生はメールあるいはチャットを利用し、教員といつでもすぐにコンタクトをとることができる環境づくりを心がけた。

3-2. 課題例

実際に学習者に出した課題例について、以下紹介する。

例1) テーマ: 地元の伝統的祭りについて

「長崎くんち」について、インターネットで調べて、次の問題に答えてください。答えは、ワードで作成して、保存したファイルをメールで銭坪まで送ってください。

- 問題1 「長崎くんち」とはどのようなものですか? 簡単に説明してください。
- 問題2 「長崎くんち」の開催期間はいつからいつまでですか。
- 問題3 今年の踊町 (おどりちょう) を6つ書いてください。
- 問題4 「長崎くんち」の観客がかける掛け声、「もってこーい (モッテコーイ)」とはどのような意味ですか。

* 参考

銭坪 メール・アドレス

zenitsubo@wesleyan.ac.jp

例2) テーマ: 大学所在地の地方自治体について

諫早市のホームページ (<http://www.city.isahaya.nagasaki.jp/>) を見て、次の課題をしてください。

答えはワード（WORD）で作成して、保存してください。ファイル（FILE）名は、自分の名前にしてください。そして、メールの添付ファイルで、銭坪に送ってください。

問題1 諫早市の人口は何人ですか？

問題2 博多駅から諫早市役所まで行きたいです。JRとバス（諫早市内）を利用します。どのように行けばいいですか？

問題3 諫早市議会の録画映像を見てください。「平成22年第4回（12月）定例会」の録画映像を見て、簡単な感想を書いてください。

*音が出るので、ヘッドホンで聞くこと。

問題4 「外国人登録原票記載事項証明書」を本人が申請する場合、請求に必要な書類は何ですか？また、手数料は一通あたり、いくらかかりますか？

問題5 諫早市には公立の図書館はいくつありますか？すべての図書館の名前を書いてください。

問題6 「諫早市スクールネット」とは何ですか？簡単に説明してください。また、「諫早市スクールネット」に会員登録してください。

問題7 「諫早市動画館」で2010年の動画を見てください。簡単な感想を書いてください。

*音が出るので、ヘッドホンで聞くこと。

問題8 「ふるさとコマーシャル」（諫早の30秒CM）を見てください。簡単な感想を書いてください。

*音が出るので、ヘッドホンで聞くこと。

問題9 「諫早国際交流センター」の「平成22年度 事業計画予定表」を見てください。今年1月、2月、3月はどんな事業が計画されていますか？

*参考

諫早市のホームページ

<http://www.city.isahaya.nagasaki.jp/>

銭坪 メール・アドレス

zenitsubo@wesleyan.ac.jp

例3) 大学について

例3-1) テーマ：大学について①

大学HPを利用して、次の問題の答えを探して書く。答えはワードで作成して、保存（ファイル

名は自分の名前にする）。その保存したファイルを、銭坪まで添付ファイルで送る。

問題1 卒業研究提出締切（4年生）はいつですか？

問題2 冬季休暇はいつからいつまでですか？

問題3 学部と日本語の後期授業が終わるのはいつですか？

問題4 2月16日は何がありますか？

問題5 春季休暇はいつ始まりますか？

問題6 卒業式（卒業証書・学位記授与式）はいつですか？

*答えの探し方：

①大学HP（<http://www.wesleyan.ac.jp/>）の左下の「在学生の皆様へ」をクリック

②「サービス」の「スチューデントハンドブック」をクリック

③「年間行事」をクリック

④「年間行事予定表」の「後期」をクリック

問題7 学生証を紛失した場合、どこへ行きますか？そして、何をしますか？

問題8 学費を分納・延納したい場合、どこへ行きますか？そして、何をしますか？

問題9 サークルを設立したい場合、どこへ行きますか？そして、何をしますか？

問題10 学内施設・器具を使用したい場合、どこへ行きますか？そして、何をしますか？

問題11 就職・進学について相談したい場合、どこへ行きますか？そして、何をしますか？

*答えの探し方：

①大学HP <http://www.wesleyan.ac.jp/>の左下の「在学生の皆様へ」をクリック

②「サービス」の「スチューデントハンドブック」をクリック

③「事務手続案内」の「こんなときはどこへ？」をクリック

例3-2) テーマ：大学について②

長崎ウエスレヤン大学のHP（<http://www.wesleyan.ac.jp/>）を見て、次のことを調べてください。答えをワードで書いて、添付ファイルで送ってください。

送信先：zenitsubo@wesleyan.ac.jp

課題 1. 大学HPを利用して、問題の答えを探して書く。答えはワードで作成して、保存（ファイル名は自分の名前にする）。その保存したファイルを、銭坪まで添付ファイルで送る。

問題 1 大学図書館の12月と1月のお休みはいつですか？

問題 2 大学図書館の「新着図書」のなかで、自分が読みたい本を一冊選んでください。そして、①「書名」、②「著者名」、③「分類記号」、④「保管場所コード」を書いてください。

* 保管場所コードが、「00（図書館）」の場合のみ、借りることが可能。保管場所コードが個人研究室の場合、その先生の許可が必要。

* 答えの探し方

問題 1

①大学HP (<http://www.wesleyan.ac.jp/>) の右上の「図書館蔵書検索で読みたい本を探してみよう♪」をクリック。

②「長崎ウエスレヤン大学図書館」の「図書館カレンダー」をクリック。

問題 2

③大学HP (<http://www.wesleyan.ac.jp/>) の右上の「図書館蔵書検索で読みたい本を探してみよう♪」をクリック。

④「長崎ウエスレヤン大学図書館」の「新着図書」をクリック。

課題 2. 大学図書館の蔵書を、大学HPで検索して、借りる。

方法

①大学HP (<http://www.wesleyan.ac.jp/>) の右上の「図書館蔵書検索で読みたい本を探してみよう♪」をクリック。

②「長崎ウエスレヤン大学図書館」の「フリーワードで探す」をクリック。

③「キーワード」に言葉を入力して、図書を検索する。

* 入力する言葉は、探したい本に関係があるものを選ぶ。

④「検索結果一覧」の中から、一冊本を選ぶ。そして、①「書名」②「著者名」③「分類記号」④「保管場所コード」をWORDで入力する。フ

イル名は「自分の名前」で保存する。

* 保管場所コードが、「00（図書館）」の場合のみ、借りることが可能。保管場所コードが個人研究室の場合、その先生の許可が必要。

⑤④で保存したものを、メールの添付ファイルで銭坪まで送る。

⑥銭坪からOKのメールが来たら、図書館へ本を借りに行く。④で選んだ本を一冊借りる。

⑦図書館から借りた本を、銭坪に見せる。OKをもらったら、終了。

* 参考

長崎ウエスレヤン大学

HP <http://www.wesleyan.ac.jp/>

銭坪 メール・アドレス

zenitsubo@wesleyan.ac.jp

3-3. 学生の解答例

ここで、学生の解答を一つ、例として紹介する（例3-1：大学について①の解答）。日本語中級クラス終了レベルで、クラスのなかでは比較的優秀な学生の解答を選択している。

学生の解答例^{〔5〕}

課題 1：

記事のタイトル：

International Talk Show & 鎮西学院校友会ホームカミング開催！

コメント：

異文化空間について、この活動は面白そうです。各国の留学生たちは積極的に参加して、すごいです!!この言葉「“Bridging Borders, Bridging Cultures” ～国境に架ける橋・文化を超えて～」について、いろいろなことを思っています。世界中のさまざまな国は一つの大家族です、みんなはこの大家族で生活する。国と国の違うがあるけど、いろいろな活動を通して、やっと理解できる。

課題 2：

問題 1 卒業研究提出締切（4年生）は12月15日（水）です。

問題 2 冬季休暇は12月23日（木）から1月6日（木）までです。

問題 3 学部と日本語の後期授業が終わるのは2月7日（月）です。

問題 4 2月16日は留学生修了式があります。

問題 5 春季休暇は2月21日（月）始まります。

- 問題6 卒業式（卒業証書・学位記授与式）は3月12日（土）です。
- 問題7 学生証を紛失した場合、学生課で行きます。そして、再交付手続きを行います。
- 問題8 学費を分納・延納したい場合、学生課へ行きます。そして、相談の上、納入期限の一週間前までに「学納金延納願」または「学納金分納願」を提出します。
- 問題9 サークルを設立したい場合、学生課へ行きます。そして、何「設立趣意書」に必要事項を記入をします。
- 問題10 学内施設・器具を使用したい場合、学生課へ行きます。そして、「学内施設・器具使用願」を提出します。
- 問題11 就職・進学について相談したい場合、キャリア支援室へ行きます。そして、就職活動、卒業後の進路等について相談に応じます。

3-4. 気づきと反省

インターネットを用いた今回の授業に対する気づきと反省については以下のとおりである。1. 通常の授業に比べて、学習者と教員との1対1の相互作用が円滑に行われた。2. 学習者の成果に対して、教員は即座にフィードバックすることが可能であった。3. 日本語能力だけではなく、コンピュータ・リテラシーに関して有能な者が仲間を手助けしていた（日本語クラス内とは違う序列関係）。4. 作業中、教室内は基本的に静かであるが、学習者は各自集中して課題に取り組んでいた。5. 学習者は課題に早くクリアすることに喜びを感じていた。6. 遠隔操作で友人に課題をやらせようとしたり、出席せず、自宅で授業を受けようとしたりする者が出た。

これらをもとに、今回実践した授業の特長についてまとめると、次のようになる。1. 動機付けの明確化、2. 即座に適切なフィードバックの提供（相互作用、協働学習）、3. 学習者中心、4. 具体的な状況・文脈と学習の関連付け、5. 内容を基盤とした学習、6. 人と人との相互作用を重視、7. 学習を支援する役割としての教員の位置づけ、8. 社会的過程としての学習（学習者の既有的知識・技能に、利用可能な情報を加えることによって、学習者自身が問題解決の過程を経て、新たな知識を作り出す）。

4. 考察

今回報告した授業のように、学習内容の実践的意味や問題解決のための具体的な手順を明確化し、社会的な文脈を重視した環境のなかで、即座に適切なフィードバックを提供可能にする学習システム（おもに教員と学習者による相互作用・協働学習）は、近年注目されている社会的構成主義や社会文化的アプローチに基づく学習観とも合致するところが多いと思われる。インターネットを適切に利用することによって、教員は学習者自らの学びを支援する役割に徹し、具体的な文脈や状況に即した学習を実現することが可能になると考えられる。

西口（2012）によれば、第二言語教育のアプローチは、次のように変遷してきたという。1940年代から構造主義のアプローチが登場し、オーディオリンガル法や直説法等が出てきた。その後、1980年代以降、コミュニケーション・アプローチが台頭し、1995年頃から社会文化的アプローチが注目されるようになってきた。社会文化的アプローチとは、状況論的アプローチの潮流のなかで生まれ、旧ソ連の発達心理学者、ヴィゴツキー（Vygotsky）の理論を継承・発展させたものである。「社会文化的アプローチの考え方を言語発達研究に置き換えると、（中略）言語を学ぶとは、文脈から切り取られた言語事項を覚えることではなく、具体的な状況や文脈を通して、目標言語話者として有能さを発揮できるようになることであるといえる」（西口2005、717）。

このように、第二言語教育においても少くない影響を与えているといわれる、状況論的アプローチやヴィゴツキー（Vygotsky）の理論に基づく学習観について少しみておきたい。状況論的アプローチといえば、文化人類学者のレイブ（Lave）らが提唱した、「状況に埋め込まれた学習」（learning embedded in situation）という概念がよく知られている（ジーン・レイヴ1993）。これは、1980年代後半から、認知心理学・認知科学の領域において登場した考え方であり、正統的周辺参加（徒弟制度）を例として、社会的参加者として学習者を捉えなおし、他者や環境との関わりのプロセスとして、学習という概念を再定式化したものである。学習が行われている具体的な文脈や環境、歴史、文化的状況などの条件に注目し、「学習」を学習者と社会等との相互作用によって構築されるものとして捉える。「学校教育における学びがとかく生活状況の文脈を離れて、

知識や技能を学習パッケージとして取り出し、これを個々の学習者に植えつけようとしているのに対して、これに対置されるものとしてこの学びの理念が提起されてきた」(佐伯2010)。「どのような状況でも通用する普遍的な知識は存在」せず、「状況や文脈から切り取られた一般的知識を学ぶことは不可能だという」立場である。(西口2005)

状況的学習論では、そもそも知識とは常に環境あるいは状況に埋め込まれているものであり、したがって本当の「学び」とは環境や状況の中で、それらと相互作用しながら成立すると考える。生きていくために役立つ「知」は決して頭の中にあるのではなく、状況に埋め込まれている。したがって、私たちの「学び」は状況との相互作用によって生じることを「状況的学習論」は強調する。

(佐伯2010、547-548)

いま、人間の精神は相互作用的な社会的過程の中で作られるという考え方が大きな力を得てきている。ヴィゴツキーの発達理論を中心とした社会的構成主義の考え方である。この考え方では、知識は外側から一方的に与えられるものでもないし、社会や文化と無縁な孤独な個人のいとなみとも考えない。知識は探究の結果自らが知識を構成していくものであり、また社会的な関係の中でそれらとの相互作用を通して獲得されるものであると考えるのである。(佐藤1996、240-241)

「状況的学習論」は「学習への新しいアプローチ」であり、「状況的学習論では、学習を実践、知識、資源へのアクセスの組織化のあり方として見ていく」(同上、35頁)のである。

繰り返すが、従来、学習とは「個人が何かを獲得すること」だと考えられてきた。しかし、1980年代後半から状況的学習論等による新しい観点が登場し、「学習を個人による知識や技能の獲得に還元せずに、実践の絶えざる再構成の中で、コミュニティのメンバーや人工物との関係の系の形成として見て行こうとする」動きが登場する。「こうした観点からすれば、学習とは、実践や社会―道具的なネットワークを組織化したり、そうしたものに参加することを含むものだということになる。」(上野2012、34)ここでは、他者あるいは置かれている状況や社会、文化的背景と学習者

の相互作用が不可欠なものとして捉えられている。

状況的学習論に基づく「学習環境のデザイン」とは、「実践へのアクセスをサポートするような資源や社会組織、機会をデザインすること」である。「学習のカリキュラムという観点は、実践におけるさまざまな資源や機会へのアクセスに着目し、資源や機会の布置をデザインすべきであることを示している」(同上39頁)。これは、まさしく今回インターネットを用いた授業がめざしていた点の一つである。実践、アクセス、サポート、資源、機会等、これらを考慮した学習環境のデザインが日本語教育にも求められている。

「教室から学びを解き放つ」として、文野(2012)は次のようにいう。

文化的な実践への参加として学びを見ると、知識やスキルの習得とは、歴史的に形成されてきた文化的実践と切り離して考えることはできないものだということがわかる。学校での学びを、レイヴやヒースが示したように文化的な実践のひとつとして考えるならば、いかにして他の文化的実践と結びつけることができるのか、ということが学校での学びをより豊かなものにするためのひとつの大きな課題となる。

(文野2012、134)

教室内に閉じられた、すなわち、社会的文脈とは切り離された知識を、個々の学習者が受身的に学ぶという学習観を払拭し、今後、どのような方向で学習環境をデザインしていくのか、日本語教育に携わる者は改めて考えていく必要があるだろう。

また、今回の授業が目指したものを、JF日本語教育スタンダードの木^[6]を用いて、示すことも可能である。JF日本語教育スタンダードによれば、「コミュニケーション言語活動」には、「受容」(読む・聞く)・「産出」(話す・書く)・「やりとり」(会話)という3つの要素があり、それぞれを媒介するものとして、テキストと方略が規定されている。授業の中では、テキストと方略の一部を教員が具体的に明示することによって、学習者が潜在的にもっている、基礎となる「コミュニケーション言語能力」を、「コミュニケーション言語活動」という実践的レベルに引き上げるための支援をおこなうことができるのではないだろうか。

最後に、日本語教育という文脈から離れて、大

学教育全般における新しい授業実践の提唱との関連についても触れておきたい。中島・中井（2005）によれば、「優れた授業実践のための7つの原則」（The Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education）は1980年代後半以降、米国高等教育学会の研究グループによって開発され、全米をはじめ世界の多くの大学に広く普及（専門領域や大学の属性を超えて）しているという。具体的な実践手法については、各大学で試行錯誤され、ウェブ上等で数多く発表されているという。

優れた授業実践のための7つの原則

1. 学生と教員のコンタクトを促す
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

上記の7つの原則及び優れた授業実践について、基礎的概念は「学生を学習に巻き込み参加させること」（Involvement）、「学生、教員、大学組織が互いに協力しあえるような全学的取り組みが不可欠（教員のみによる取り組みではなく、大学組織の支援、学生側の参加が不可欠）」（中島・中井2005a）であることがいわれている。これらは、今回の実践が目的とするところと多くの共通点がある。

5. おわりに

コンピュータを利用した学習といっても、必ずしも新たにソフトを導入・開発する必要はなく、今ある資源を活用することで、効果的なクラスを構成することも十分可能であるといえるのではないだろうか。クラス運営上の問題やコンピュータ使用環境の整備など、今後の課題も多いが、より効果的な日本語学習を考えるうえで、今回の報告が一つの示唆になればと思う。

昨今の大学教育は、コンピュータやインターネットの利用が不可欠になってきている。直接的に授業にかかわるものばかりではなく、教育・生活全般に関わる様々な情報の提供や管理等で、留学生を受け入れる大学側は、頭を悩ませていることも多いだろう。今回のような授業において、留学生にとって身近で重要なテーマに関連する課題

を設定し、積極的に大学HPや地方自治体HPの活用を促すことは、日本語学習以外の面でも大きな利点があるのではないだろうか。

さらに、日本語教育が教室から解放されるのと同時に、教室の外における学習機会の重要性についても再認識したい。学習者の日本語学習は、日本語教員のみならず、他の専門の教員や職員を含めた大学の全学的な取り組みが不可欠なのである。

大学における日本語教育関連授業もまた、はじめに述べたような高等教育における質的転換や新しい能力の育成等の要請と無関係ではないだろう。いうまでもなく、留学生の教育も、日本人学生の教育と同様、日本の大学が責任を持って取り組むべき事柄である。繰り返すが、教育は教室の中でのみ行われるものではない。キャンパス内や学内外のあらゆる資源を動員した、各大学独自の教育のあり方が問われる時代を迎えているのである。

注

- 1 「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力から構成されている。
経済産業省「社会人基礎力」
<<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm>>, 2014年1月28日最終アクセス。
- 2 2010年8月の日本語教育学会夏期集中研修ワークショップ「インターネットを取り入れた学習環境のデザイン」において、これらの取り組みは具体的に紹介された。
- 3 Bernie Dodge, “WebQuest.Org” <<http://webquest.org/>>, 2013年5月28日最終アクセス。
- 4 「ウエブクエスト（WebQuest）」は6つのセクションに分けられる。1. インTRODクッション、2. タスク、3. リソース、4. プロセス、5. 評価、6. まとめ、である。
- 5 文法等の誤りはそのままの状態に掲載している。
- 6 国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」
<http://jfstandard.jp/summary/ja/render.do>
2013年4月13日アクセス。

参考文献

- 上野直樹（2012）「学習―状況的学習論の観点から―」茂呂雄二他2012『状況と活動の心理学―コンセプト・方法・実践』新曜社
- 佐伯胖監修（2010）『「学び」の認知科学事典』大修館書店、121-122頁

- 佐藤公治 (1996)「学習の動機づけ・社会的文脈」
波多野誼余美編『認知心理学 5 学習と発達』
東京大学出版会
- 島田徳子・リチャード・ハリソン (2001)「インターネットを利用したConstructivistタスク型教材：“WebQuest”の紹介と実践」『日本語国際センター紀要』11、独立行政法人国際交流基金
- 中島英博・中井俊樹 (2005a)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」大学教育研究ジャーナル 2, 71-80
- 中島英博・中井俊樹 (2005b)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」名古屋高等教育研究 (5), 283-299
- 西口光一 (2005)「社会文化的アプローチ」『新版日本語教育事典』大修館書店
- 西口光一 (2012)「日本語教育―社会文化的アプローチと第二言語の指導法」茂呂雄二他『状況と活動の心理学―コンセプト・方法・実践』新曜社
- 文野洋 (2012)「学校の外での学び―教室から学びを解き放つ―」茂呂雄二他『状況と活動の心理学―コンセプト・方法・実践』新曜社
- 松下佳代編 (2010)『＜新しい能力＞は教育を変えるか』ミネルヴァ書房
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ ウェンガー (1993)『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』産業図書